



インフォメーション
日本蜘蛛学会第32回大会
(東京都)のお知らせ

TEL:03-5841-7544, FAX:03-5841-8192

E-mail: tmiya@uf.a.u-tokyo.ac.jp

申し込み締切: 2000年7月7日(金) 必着

本年度の日本蜘蛛学会大会・総会は、東京都の東京大学山上会館で開催されることになりました。詳しくは大会案内をご覧のうえ、多数ご参加ください。

日程: 2000年8月25日(金)~27日(日)

25日 18:00~19:00 ビデオ上映会

26日 9:30~12:00 シンポジウム

(クモの採餌戦略の可塑性(仮題))

13:00~14:00 総会

14:00~17:00 シンポジウム

(食物網のなかのクモ(仮題))

18:00~20:00 懇親会

27日 9:30~12:00 一般講演

13:00~14:00 ポスター発表

14:00~15:30 一般講演

会場: 東京大学山上会館

(文京区本郷7-3-1, TEL: 03-5841-2320)

参加費用: 大会費 6000円(学生4000円)

懇親会費 6000円

昼食弁当 1個600円

(事前申し込み)

連絡先: 〒113-8657 文京区弥生1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科

生物多様性科学研究室 宮下 直

会長就任のご挨拶

吉田 真

私はこのたび、日本蜘蛛学会の会長に選出されました。力不足で、会長の任に堪えるかどうかはなほだ心もとありませんが、宜しくお願いたします。以下に、学会の課題などについて思いつくままに述べてみたいと思います。

1) 学会の目的

会則の第2条には、「本会は蛛形類および多足類に関する研究の進歩と普及をはかることを目的とし、あわせて研究者相互の情報交換センターとする」という日本蜘蛛学会の目的が明記されています。1936年に世界で最初に設立されたクモ学会である日本蜘蛛学会がその目的に照らして十分な活動ができているかどうかを、検討してみる必要があります。

2) 「研究の進歩」および「情報交換センター」について

本学会は、岸田久吉氏をはじめとして、多くの優れた研究者を生み出してきました。これは本学会の誇るべき伝統です。しかし、世界の「ク

モ学」はさまざまな分野で急速に進展しており、とくに 1990 年以降は膨大な研究報告がなされています。研究者人口も急増しており、アメリカ蜘蛛学会などでは優秀な若手研究者が続々と生まれています。このような状況のなかで、本学会が「研究の進歩」に貢献するためには、会員諸氏のいっそうの努力が必要です。

第一に、大学や研究機関に勤務している研究者は、率先してその研究の成果を世に出さなければなりません。優れた研究論文を量産されている方々ももちろんおられますが、私も含め、もう少し頑張らなければならない研究者もたくさんいると思います。言うまでもないことですが、大学などに勤務している研究者はいわゆるアマチュアの研究者に比べて、研究時間の面でも利用できる研究設備の面でも有利な立場にあるわけですから、優れた研究を行って、「日本のクモ学」をリードしていかなければなりません。

第二は、若手研究者の養成です。若手研究者の養成なくして、学会の未来はありません。以前に比べて最近では、蜘蛛形類を研究する学生や大学院生がいくらか増えてきたように思います。これは、研究対象としての蜘蛛形類のおもしろさが認識されるようになったことの反映でもあります。継続的に若手研究者を養成するためには、大学などに勤務する研究者がその指導にあたらなければなりません。私も今年からようやく大学院担当の教員になりましたが、今後大学院や卒業研究を指導する研究者を増やすことが大きな課題です。

第三に、本学会には非常に多くの「アマチュア」会員がおられます。どこまでを「アマチュア」と呼ぶかは難しい問題ですが、大学などに勤務する研究者とその下で研究している大学院生や大学生を除く人々を「アマチュア」と定義するならば、「アマチュア」は会員の過半数、ひ

よつとすると7割くらいになるかもしれません。これはたぶん（確かめたわけではありませんが）アメリカ蜘蛛学会やイギリス蜘蛛学会ではみられない特徴だと思います。この会員構成をどのように考えるかは、非常に大きな問題です。

この問題は、さまざまな側面から検討しなければなりません。たとえば、本学会には優秀な「アマチュア研究者」が多数おられます。会長を長年務められた八木沼健夫氏も、高校教師を務めながら博士の学位を取得され、大学教授になられました。優秀な「アマチュア研究者」がさらにその能力を発揮されるために、本学会として何らかの援助策が可能かどうかを検討していかなければならないと思っています。

第四は、情報化です。さまざまなレベルで、学会の情報化を進めなければなりません。まずは役員の情報化です。新たに選出された会長と5名の幹事はすでに電子メールで、さまざまな実務をこなしています。次は、会員や一般の方にも開かれた情報サービスです。この点は今のところ、個人の努力に任されています。私もそうですが、文献検索や標本同定などで、谷川さん・池田さん・八幡さんなどのホームページを利用している研究者は多いと思います。また、宮下さんらが作られたクモ・ネットは情報のサービスや若手研究者の育成に大きな力を発揮しつつあります。本学会としても、ホームページを早く完成させなければなりません。

3) その他の諸問題

各地同好会との協力・協同

各地クモ同好会は、当然ながらそれぞれ独自の目的を持っておられますが、その活動には「研究の普及と進歩」「情報交換センター」という学会の目的に合致する部分がたくさんあります。従って、学会としてもこれらの組織とどのよう

な協力・協同関係を築いていくかを考えなければなりません。これはいままで全く論じられなかった問題で、私にもアイデアがあるわけはありませんが、今後の検討課題だと思います。

文化論的活動について

一昨年の大会では市民向けのプレ・シンポジウム「クモの文化論」が開かれ、さまざまな方がそれぞれの研究や作品を公開されました。それに引き続いて昨年にも、姫路科学館で「クモ展—身近な動物・小さな芸術家」が開かれ、文化論的活動はひとつの流れとなりつつあります。このような活動は、クモ嫌いの文化を克服し、正しいクモ観・自然観を広めるために必要なことだと思います。

市民に開かれた取り組み

一昨年の大会では、地元の公民館との共催で子供向けの観察・採集会が開かれ、大変好評でした。すでに各地で会員の方がさまざまな自然観察会に参加しておられますが、学会としてもこのような活動を推奨していきたいと思います。

6月18日には、鹿児島県加治木町で恒例のクモ合戦が開催されることになっています。私は、日産財団研究プロジェクト「日本人の自然観の形成」に斎藤慎一郎さんとともに参加していますが、今回はその研究の資料収集を兼ねて、日本蜘蛛学会会長として公式に訪問する予定であります。すでに先方も歓迎の意向を示されておりますので、町長さんやクモ合戦保存会の人たちなどと懇談してくるつもりです。



以上、かなり勝手な思いこみを列挙しましたが、会員諸氏から忌憚のないご意見を頂ければ有り難いと思います。今後とも宜しくお願ひします。



同好会情報

日本には日本蜘蛛学会だけでなく、各地に同好会がある。ここでは、そこで行なわれる採集会や講演会、そこで発行される定期刊行物などの活動内容を紹介する。興味を持たれた方はぜひ入会して、行事などに参加されてはいかがだろうか。

東京蜘蛛談話会（会長：萱嶋 泉）

会報「KISHIDAIA」を年2回、「談話会通信」を年3回発行。採集会年4回・合宿年1回・総会例会などを年2回実施。

今年度の採集会は、東京都町田市都立小山田緑地。

2000年5月21日（日）

7月2日（日）

10月15日（日）

2001年2月18日（日）

小田急線町田駅バスセンター12番乗り場午前10時10分集合

世話人 今井正巳 (042-755-3086)

合宿は、2000年7月22日（土）～24日（月）
静岡県大井川鉄道沿線

宿舎：中根川町営の宿「ウッドハウスおろくぼ」

静岡県榛原郡中根川町水川866-5

費用：8000円（1泊2食）

申し込み：258-0018

足柄上郡大井町金手1099 池田博明

Tel (Fax) 0465-82-2105

メールでも可 6月30日まで

合同例会は2000年12月3日（日）の予定。
国分寺市商工会館 午前10時より。

KISHIDAIA78号(2000.2.29発行)

小笠原幸恵：1卵のうから生まれたゲホウグモの腹部の形態の違いおよびその生活史について

平松毅久・笠原喜久雄：スズミグモを埼玉県で初記録

永井均・新海明：キシノウエトタテグモの扉づくり

谷川明男：ジョロウグモ雄の成熟過程の観察

宮下和喜：コガネグモの幼体発育，越冬および産卵

加藤むつみ：トゲグモの道(丹沢地域のトゲグモの分布より考察した移動仮説)

DRAGLINES

新海明：ヤリグモに捕食されていたミナミノアカイソウロウグモ

新海明：死んだジョロウグモを食べようとしていたミナミノアカイソウロウグモ

新海明：ミナミノアカイソウロウグモによる「網食い」の観察

谷川明男：スズミグモの網にオオジョロウグモの雄

谷川明男：泡瀬にはヤマトウシオグモがいっぱいいる！?

谷川明男：ハラビロスズミグモは夜は網に出ている

笹岡文雄：キシノウエトタテグモの徘徊時期について

安田明雄：円海山でシロオビトリノフンダマシを採集

甲野涼：飼育下におけるコケヒメグモ

<目録ドラッグラインズ>

谷川明男：沖縄島のクモ採集記録

池田博明：1993年9月の高知のクモ

平松毅久：東京クモ談話会1995年度合宿報告
高知県東部のクモ

平松毅久：東京クモ談話会1998年度採集観察
会報告 天覧山のクモ

新海明・金野晋：東京蜘蛛談話会1999年
度合宿報告 福井県敦賀市周辺のクモ

谷川明男：日本産クモ類目録(2000年版)

入会申し込み

229-0038 相模原市星が丘 1-5-5

今井正巳(事務局)

Tel 0427-55-3086

会費：年3800円(学生2000円)

(2000年4月より)

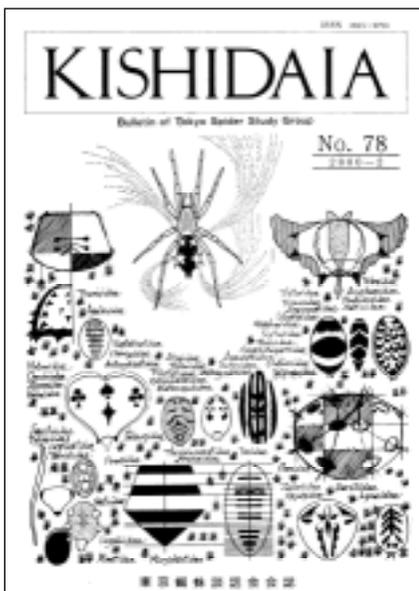
関西クモ研究会(会長：山野忠清)

会報「くものい」と年2~3回発行。採集会・研究会例会などを年数回実施。

採集会は、2000年5月28日(日)姫路科学館周辺。姫路科学館ロビーに午前11時集合

9月24日(日)奈良方面(詳細は未定)

例会は、2000年12月10日(日)に大阪市の四天王寺高校で実施。



くものいと 27号 (2000.1.15 発行)

特集 一クモリストー

新海 明：今なぜ、県別リストか

田中穂積：大阪府のクモ類

吉田 真：京都府のクモ類 (2)

吉田 真：京都・静原のクモ

西川喜朗：滋賀県のクモの同定記録

フィールド紹介

船曳和代：私のお気に入りのフィールド

同定指南

加村隆英：ワシグモ科 Gnaphosidae (その1)

海外の研究トレンド

樹元敏也：クモ類の形質進化を探る—分子系統

樹最前線—

関西クモ研究会採集会報告

船曳和代：姫路市青山

クモエッセイ

八幡明彦：蜘蛛好き変人とその仲間たち—クモ

グッズ編—



入会申し込み

567-8502 茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 0726-41-9555 (西川研)

0726-41-9550 (加村研)

Fax 0726-43-9432

会費：年 1000 円

中部蜘蛛懇談会 (代表：緒方清人)

会報「蜘蛛」を年1回、「まどい」を年3回発行。採集会・例会を年数回実施。

採集観察会は

2000年5月14日(日) 岐阜県瑞浪市竜吟の滝

9月3日(日) 名古屋市興正寺

10月22日(日) 岡崎市矢作川河川敷

合宿は、三重蜘蛛談話会との合同

2000年8月5日(土)~6日(日) 岐阜県中濃方面にて(詳細未定)

総会・研究会は、2001年2月11日(金)に予定。

蜘蛛 (KUMO) 31号 (1999.2.11 発行)

内容は、遊絲4号を参照のこと

入会申し込み

444-0076 岡崎市井田町字荒居 47-6

板倉泰弘 (事務局)

Tel 0564-28-5857

E-mail : yasuhi@heatful.or.jp

会費：正会員年

2500円(高校生

以下1000円)

準会員「まどい」の

み500円



三重クモ談話会（本部：太田定浩）

会報「しのびぐも」を年1回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

採集観察会は、安芸郡河芸町で実施。

2000年5月28日（日）

9月17日（日）

12月3日（日）

近鉄白子駅西口前。午前10時集合。大雨以外は決行。参加希望者は事務局まで連絡のこと。

合宿は、中部蜘蛛懇談会との合同

2000年8月5日（土）～6日（日） 岐阜県にて（詳細未定）

総会兼学習会、懇親会は、2001年2月24日（土）～25日（日）に予定。

しのびぐも 27号（1999.12.25発行）

福島彬人：蜘蛛三題

緒方清人：伊那市とその周辺のクモ

新海 明：東日本でのシノビグモの採集記録

貝發憲治：上野市の真正クモ類（その1：概要）

石井こうこ：合宿に参加して

三重クモ談話会活動報告

入会申し込み

515-0044 三重県松阪市久保町 1843-157

貝發憲治（事務局）

会費：年1500円

和歌山クモの会（会長：米田 宏）

平松毅久

会報「和歌山クモの会会報」を年1回発行。

総会・観察会を年1回開催。

採集観察会および総会は、2000年7月30日

（日）に日高郡美浜町の海岸で実施の予定。

和歌山クモの会会報 No.9（1999.6.30発行）

内容は、遊絲5号を参照のこと。

入会申し込み

642-0002 海南市日方 1156

東條 清（事務局）

会費：年500円

関西クモゼミ

毎月1回、第3か第4の日曜日に滋賀県草津市の立命館大学で開催。会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 立命館大学理工学部生物地球科学研究
吉田 真 077-561-2660

東京クモゼミ

毎月1回、第1日曜日に、千葉県市川市の加藤宅で開催（2000年2月より）。会費などなく誰でも参加できる。東京クモゼミ報告（プリント）を配布。

連絡先 新海 明 042-522-2605

（新海 明）

言いたい！聞きたい！



西表クモ談話会奇行（4）

16日の夜、まずは車を駐車する空き地で、夜の観察前に恒例となった中年男3人による『ろまんちっく』な星空観賞である（別に祈ってい

たわけではない)。昼間はグンバイヒルガオのピンクの花がまぶしい空き地も一面漆黒の闇に塗りこめられ、それが一段と星のきらめきを際立たせる。小さな星々を淡く刷毛で掃いたような天の川。天の川など見るのはほんの物心ついた頃以来かもしれない。星に詳しい新海氏が色々解説するが、ろくに知らない筆者は満天の星にただ呆然とするばかり。しかし蒸し暑い夜の観察もこの美しい夜空が見られるからこそ頑張れた気がする。星空への名残を惜しむようにヒメユウレイの待つ林へと向かう。結局この日も造網は見られなかったが、5m程上の木の梢でリュウキュウアカショウビンが懐中電灯の光で安眠を妨げられたせいか羽をばたつかせていた。

17日の朝新海氏は島を去り、午前中は祖納で採集した後、午後は祖納の北西にある星砂の浜で泳ぐことになった。移動の途中電柱にカンムリワシの姿があった。谷川氏に双眼鏡を貸してもらって見たが、猛禽類らしくりりしい面構えであった。そして浜で泳ぐ段になって、これまでカンカン照りが続いていた空から雨が落ちて来たのは皮肉であった。通り雨ですぐやんだが、日が陰り、風邪を引いていた筆者は寒気を覚えて十分泳ぎを堪能できず、シュノーケルをつけて泳ぎ潜る谷川氏の勇姿を恨めしげに眺めることになったのは残念であった。この日の夜も新



タニカワアシナガグモ (写真: 谷川明男)

海氏の宿題『姫幽霊の機織り』の観察に挑んだ。前夜に続いてリュウキュウアカショウビンが迎えに来てくれた。この林をめぐらしているらしい。高那地区も島の西部と時差で降雨があったらしく大分ヒメユウレイの網も壊れていて期待を持たせた。雨上がりの葉裏にはどこから出てきたのか、その名もタニカワアシナガグモというウロコアシナガに似た緑のクモが、直径10cm前後の小さな網を張っていた。また普段は網を張っているサキエダオニグモが、水平な2本のしおり糸に宙吊り状態 (a living bridge) でぶら下がり餌を食べていた。手掴みで餌を捕えたのかもしれない。見回りを続けたが、『姫幽霊の機織り』は気色さえ見えずまたしても徒勞に終わった。宿へ帰る途中、路上にヘビを発見。

「サキシマハブか!？」と色めき立って車を降りたが、縞模様がありサキシマハブではなかった。宿に帰って『日本の両生類・爬虫類』(松井孝爾著、小学館) という図鑑で調べるとサキシママダラという夜行性の蛇で、カエルやトカゲだけでなく、他の蛇、サキシマハブなども襲って食べる習性があるらしい。谷川氏と部屋の前で早朝高那へ行く約束をしてそれぞれの部屋へ戻り、西表最後の夜はすぐ眠りに落ちた。

そしてついに島を去る18日の早朝、勇んで高那へ出掛けたが、『姫』に縁がないのか、結局筆者滞在中に新海氏の宿題をやりとげられなかった。結局最後までいた谷川氏も滞在中に造網を見ることはできなかったのだから、この『姫幽霊』一筋縄ではいかない(後日新海氏の執念が実り、少しだけ造網を見ることができたらしい。めでたし、めでたし)。帰り道白み始めた空を朝日のように紅いリュウキュウアカショウビンが今日の好天を約束するように飛んで行く姿を車の窓から見て、つくづく西表へ来て良かったと思った。惜しくもヤマネココそ見られなか



サキエダオニグモ (写真: 谷川明男)

ったものの (そこまで望むのは贅沢と言うものだ), 目的のクモやまた初めての興味深いクモも見られたし, 西表の自然 (ほんの一端にすぎないが) に触れることの出来た, 有意義な, アツという間の1週間だった. これもすべて車の運転から現地ガイドと大活躍の谷川明男氏のお陰である. 最後に氏への深甚な感謝の意を表してこの連載を終わろうと思う.

European Colloquium of Arachnology 参加記 (2)

宮崎勝巳

さて前号でいろいろ書いたように, 大小さまざまなトラブルを乗り越え (いくつかは私の不注意に起因するのですが), 何とか大会初日の朝を迎えることが出来ました.

—大会のこと—

朝食もそこそこに会場へ向かい, そこでようやくゆっくりとアブストラクトを眺めることができました. ざっと参加者一覧を見たところ, 残念ながら知り合いの研究者は一人もおらず, ほとんどが聞いたことのない名前ばかりです.

ちなみに私はまっとうな (?) "arachnologist" ではなく, メインの研究テーマ (及び今回の発表の題材) はウミグモ (Pycnogonida) という, 最近ようやく鋏角類の一角員として認められつつある (と思われる) 動物の比較形態・発生学なので, この状況も事前に覚悟はしていたのですが

会場はホテルに併設された専用の大会議室で, 100人を越える参加者を余裕で収容できる, 立派なものでした. 設備も, スライドプロジェクターのオートフォーカスが時々うまく作動しないのを除くと, まずは申し分ないものでした. 発表内容をいちいち紹介してもしようがないので, まずは参加者の国籍と, 発表の分野及び用いた材料とを, アブストラクトから拾い上げて, 多い順から並べて提示することにします.

なお発表は, 口演 49+ポスター42 の計 91 題でしたが (ワークショップ「湿地のクモの多様性」での口演を含む), 複数の分野と材料にまたがっているものも多いので, それぞれの合計はそれより多くなっています. また発表分野の分け方は, かなり恣意的であることをお断りしておきます.

(参加者の国籍)

| | |
|-----------|-----------|
| チェコ | 13人 |
| デンマーク | 11人 |
| スロバキア | 9人 |
| オーストリア | 8人 |
| ドイツ | 7人 |
| ベルギー | 7人 |
| ハンガリー | 6人 |
| スイス | 5人 |
| ポーランド | 5人 (私は除く) |
| ロシア | 5人 |
| その他のヨーロッパ | 26人 |

その他の国 2人 (日本・米国)
 (合計 104人)

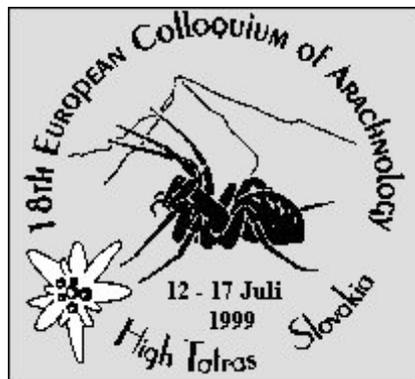
(発表の分野)

生態 42題
 ファウナ・生物地理 25題
 分類 10題
 成長・生活史 6題
 形態 5題
 遺伝 4題
 行動 4題
 進化・系統 4題
 その他 8題

(用いられた材料)

真正クモ類 81題
 ザトウムシ類 5題
 ダニ類 5題
 サソリ類 3題
 ヒョケムシ類 2題
 その他の蛛形類 2題
 その他の鋏角類 1題 (ウミグモ類)

参加者については、やはり地理的に近い国からの参加が多いようです (デンマークが多いのは次回開催地のため)。特にロシアを含む旧東側の国々からの参加が、目立っています。発表の分野については生態学関連が、材料については真正クモ類が断然多くなっています。**Arachnology** は伝統的に、これらの分野・材料を中心に発展してきたという背景があるものと推測されますが、これまでのこの **Colloquium** の歴史においても、これだけ偏ったのは珍しいという声をあちこちで聞きました。特にいわゆる西側の研究者が、この事を批判的にとらえていたのが印象的でした。これをもって今回の大



会は低調であったとは一概には言えないのですが、発表後の質疑応答でも会場のあちこちから質問が飛び交うという状況がちょっと少なかったように感じましたし、また分子生物学の手法を用いた研究がほとんどなかった (私が把握した限り3題) のも、今時の国際学会ではむしろ珍しい状況だと思います。

発表については、私の興味に引かれるものがあまりなかったのが、ちょっと残念でしたが、もちろん成果もいろいろありました。ベルリン工科大の Dr. J. Haupt (蛛形類の分類・形態) と、同じくベルリンのフンボルト大自然史博物館の Dr. J. Dunlop (鋏角類の古生物学) とは、私のポスター発表の際に、いろいろと有意義なディスカッションをしていただきました。その後8月には、ベルリンにそれぞれの研究室を訪問する機会を得、また多くの別刷もいただきました。会に同行されていた Haupt 先生の奥様は、ご存じの方も多いと思いますが、日本人の方で、うちの家族が大いにお世話になりました。また特にポスター発表では、学生や自分と同世代の研究者 (ちなみに私は35) が多く、分野は違えどもいろいろと話をすることで、大いに刺激を受けてきました。そのうちの一人、プラハにあるカレル大学の Dr. J. Kral (真正クモ

類の染色体学)の研究室には、帰国前に訪問する約束をしています(これを書いている時点では9月末の予定)。

この大会では、スポーツ大会や各種パーティーといったレクリエーション関係の行事が多く、同伴家族向けのエクスカージョンも毎日開催され、一週間という長丁場を飽きさせない工夫が多く盛り込まれていました。私も一日だけさぼってエクスカージョンに参加しましたが、「地球の歩き方」にもほとんど情報のないスロバキア東部の観光名所は、大変興味深いものがありました。ただ天候不順のため野外での行事日程がいろいろ変更されたのですが、そのアナウンスがうまく行われず、現場での混乱が多かったのは少し残念でした。運営の方にはいろいろと親切にしてもらい、トラベラーズチェックの両替のため、わざわざ町の銀行まで車を出してくれたり、子供の食事などについても何かと気を使ってもらいました。どうも唯一の日本人で、しかも子連れということで、大会本部としても取り扱い(?)に慎重になっていたようです。食事は肉料理が中心でしたが、ポーランドのそれより癖がなくずっと日本人の舌に合い、これまたおいしいビールやウォッカと相まって、大いに楽しめました。またスタラ・レスナは、タトラ山地(カルパチア山脈の一部)の麓に位置する、国立公園内にある景勝地で、周りの自然環境は抜群に心地よく、クモや昆虫採集が趣味の人達(残念ながら私は該当しませんが)は、大いに成果があがったようです。

帰りは行きと逆コースでクラクフへ戻りましたが、ポブラドのバスセンターで、中国を出発点に一年間の放浪の旅をしているという日本人女性と出会い、クラクフのアパートに三日程泊めさせるというおまけ(?)も付きました。

—大会後に思ったこと—

実は私にとって"arachnology"関連の学会への参加は、今回が初めてです。蜘蛛学会への入会は大学院生の頃なので、既に10年が経ちますが、まだ一度も大会に出たことがありません。材料がウミグモなので、会則にある「本会は蛛形類および多足類に関する研究の進歩と普及をはかる云々・・・」という文言が引っかかっているというわけではないのですが、時期的に合わないこともあり、今に至っています。そんなわけで、今回の大会に参加するにあたっては、"arachnologists"とはいったいどんな人種なのだろうかなどと、変な不安もあつたりしたのですが(他の分野の人から見ると、私も"arachnologist"の範疇に入るらしいですが)、当然ながらそれは全くの杞憂に終わり、まずまずの成果を得ることが出来ました。

さて前回は述べたように、この学会にはホームページがあり、そこから参加申し込みが出来ることになっていたのですが・・・)、またホームページ自体が1st及び2nd circularとなっていて、最後の3rd circularのみ、参加申込者に印刷物で送られてきました。この colloquium 自体は"European Arachnological Society"の管轄なので、その会員にはおそらく印刷物での告知があつたのでしょうか、インターネットを利用した告知には、通信・印刷費の節約の他、私のような思いがけない飛び込みがあるといった、副次効果もあるものと考えられます。ただ今回の送信フォームの不具合のようなトラブルがあると、その処理で一気に変になるようですが・・・またこれとは直接関係ないのですが、日本蜘蛛学会でも近い将来、学会のホームページを立ち上げて、そこから各種情報を内外に発信できるようになれば、今後の日本の「蛛形類学」の発展に寄与するところ大ではないか

と思うのですが、いかがでしょうか。

もし将来, "1st Asian Colloquium of Arachnology" といった大会が開催されるようなことがあった場合, その規模や, 発表の研究分野, 使われた材料などについて, ヨーロッパのそれとどのような違い (あるいは特色) が出てくるのか, いろいろ想像してみるの楽しいと思いますし, またそれによって日本あるいはアジアの "arachnology" の現状と課題といったことも, 少し見えて来るかもしれません. ちなみに次回第 19 回は, 2000 年の夏にデンマークのアールス (Arhus) で開催予定とのこと. 日本限定の話題ではなく, 広く general な話であれば, ヨーロッパ人以外の参加も制限なしのことですので, もし日程と費用の都合がつけられれば, 日本の「蛛形類学」の実力を示すべく, 大いに参加されてはいかがでしょう? おそらくお互い大いに刺激しあい, 非常に有意義ではないかと思えますし, 広くユーラシア規模の研究のきっかけにもなるのではと, 素人考えをしたりもしています.

以上, 最初に心配した通りの, 何ともしとめない文章になってしまいましたが, 最後までお付き合いいただき有り難うございました.

採集情報

日本各地で採集された, 稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する. これを読み, 「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい.

ムツトゲイセキグモ

三重県南牟婁郡紀和町湯の口 1999 年 8 月 7 日 ♀ 成体他 10 三重クモ談話会・中部クモ懇談会合同合宿参加者一同

千葉県千葉市若葉区中野町 2000 年 1 月 7 日 卵のう 6 泉 宏子

神奈川県愛甲郡清川村宮ヶ瀬 1999 年 9 月 4 日 ♀ 成体 山川 守

マメイタイセキグモ

神奈川県愛甲郡清川村宮ヶ瀬 ♀ 亜成体 1999 年 8 月 11 日 山川 守

神奈川県厚木市上荻野 1999 年 8 月 21 日 ♀ 成体 山川 守

ヤマトウシオグモ

沖縄県沖縄市泡瀬 1999 年 7 月 27 日 成体幼体 6 佐々木健志, 谷川明男, 中山正明



ヤマトウシオグモ (写真: 谷川明男)

スズミグモ

東京都町田市小野路町向坂 1999 年 7 月 17 日 ♀ 成体 小峰光弘

東京都町田市三輪町 1999 年 7 月 30 日 ♀ 成体 小峰光弘

神奈川県川崎市麻生区王禅寺 1999 年 6 月 21 日 ♀ 亜成体 大西公一

ヒゲナガハシリグモ

和歌山県東牟婁郡那智勝浦町平瀬 1999年8月1日成体 稲垣成二

(新海 明・谷川明男)



最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のある論文をいくつか簡単に紹介する。

①: Kamura, T. 1999. Spiders of the genus *Zelotes* (Araneae: Gnaphosidae) from Ryukyu Islands, Southwest Japan. *Acta Arachnol.*, 48:79-91.

Zelotes donan Kamura 1999 ドナンケムリグモ, *Z. zephyrus* Kamura 1999 ニシカゼケムリグモ, *Z. gladius* Kamura 1999 ミヤコケムリグモ, *Z. ryukyuensis* Kamura 1999 リュウキュウケムリグモ, *Z. flexuosus* Kamura 1999 ツヅラケムリグモを新種として記載した。

②: Yoshida, H. 1999. Two species of the genus *Theridion* (Araneae: Theridiidae) from Japan. *Acta Arachnol.*, 48:127-130.

Theridion nojimai Yoshida 1999 ノジマヒメグモを新種として記載し, *Theridion ogasawarense* Yoshida 1993 オガサワラヒメグモを *Theridion melanostictum* O.Pickerd-Cambridge 1876 の新参シノニムとした。

③: Tanikawa, A. 1999. Japanese spiders of the genus *Hersilia* (Araneae: Hersiliidae). *Acta Arachnol.*, 48:131-137.

Hersilia okinawaensis Tanikawa 1999 オキナワナガイボグモと *H. yaeyamaensis* Tanikawa 1999 ヤエヤマナガイボグモとを新種として記載した。

④: Irie, T. 1999. A new species of the genus *Nesticus* (Araneae: Nesticidae) found in a tuff cave from Oita Prefecture in Kyushu, Japan. *Acta Arachnol.*, 48:139-142.

Nesticus kunisakiensis Irie 1999 クニサキホラヒメグモを新種として記載した。

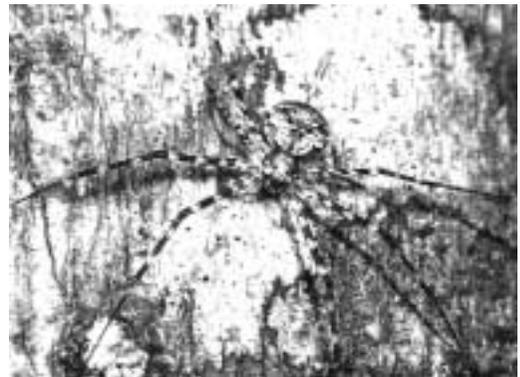
⑤: 谷川明男. 日本産クモ類目録 (2000年版). *Kishidaia*, 78:79-142.

2000年2月までの資料によって日本産のクモ目録を作成した。

(谷川明男)



ギャラリー



ヤエヤマナガイボグモ

糸疣が腹部後端から長く飛び出しているところからナガイボグモの名がある。体色は木の地肌そっくりで、じっとしているこのクモを見つけることは至難の業である。



原稿募集中

「遊糸」の原稿を募集中です。ちょっとした観察記事（短報）、会員に広く知ってもらいたい情報（総説）、採集記録、文献紹介、各地の同好会の催物情報、研究上の標本や資料募集の記事など、なんでも構いません。こんなコーナーも作って欲しいという希望があれば、それもOKです。会員の皆さんのご協力を是非お願いします。

投稿にあたってのお願い

1. 原稿はクモ形類・多足類に関することならなんでも構いません。
2. 字数制限はありませんが、あまりに長文の場合は削除や分割での掲載をお願いすることもあります。
3. 原稿はワープロ、手書き原稿、はがき、E-mail などなんでも構いません。

原稿送付先

190-0022 立川市錦町 3-12-16-1103

新海 明まで

E-mail では dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

(谷川明男) まで

発行は、年2回（5月、11月）の予定。締切は発行月の前月末日です。



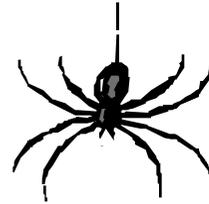
編集後記

宮崎勝巳さんの Euroean Colloquium of Arachnology 参加記を興味深く読ませていただいた。アジアやアメリカ、ヨーロッパなど世界

のクモ事情に詳しい方が、会員の中にも多くおられるに違いない。今後とも遊糸を通じてぜひご紹介下さればと思う。

翻って、日本でも最近では各地の同好会同士の相互交流が活発になりつつあるような気がする。会誌の原稿集めや予算など、どの会もそれなりに苦勞が多いと思う。そんなときに相互に会員になりあうことは、この問題を解決するひとつの道となろう。情報の交換にとっても良いことである。遊糸がその役割の一端を担っているのであれば望外の喜びである。今後とも会員相互の交流の場になるように遊糸を育てたいと考えている。ご協力を切にお願いする次第である。

(新海 明)



日本蜘蛛学会

(2000年4月から役員が変わりました)

入退会は

事務局

305-8604 つくば市観音台 3-1-1

農業環境技術研究所環境生物部

田中幸一

Tel 0298-38-8313 (Fax 0298-38-8307)

E-mail: tanaka@niaes.affrc.go.jp

会費の問い合わせ及び住所変更は

会計幹事

170-0004 豊島区北大塚 3-12-21

笹岡文雄

Tel 03-3918-1945

年会費 正会員 7000円 (学生は5000円)

郵便振替口座 00970-3-46745

遊絲 第6号

2000年5月25日発行

編集者 新海 明，谷川明男，池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 吉田 真
